

平成28年度 水城高等学校自己評価表

目指す 学校像	○学力の向上を図り、グローバル化・多様化する社会に通用できる人材育成を目指す。
	○学業と部活動の両立を目指し、活力ある学校を目指す。
	○各自の個性・能力をさまざまな場で表現できる、コミュニケーション能力の高い人材の育成を目指す。
	○健全な道徳観を有し、友愛の情を育み他人と協調し、社会に貢献できる人材を育成する。

昨年度の成果と課題	本年度の重点目標	重点目標	達成状況
<p>・東京工業大学をはじめ、北海道大学・東北大学・筑波大学などの難関大学への合格、また茨城大学の合格者数を増やすなど、国公立大学・大学校を合わせて200名の合格者を出した。</p> <p>・私立大学の合格者は早稲田・慶應義塾大学をはじめ983名となった。</p> <p>・今年度は旧帝大の合格者数をさらに多く出すこと、また、一人ひとりの希望に合った進路実現を目指す。</p> <p>・部活動の一層の活性化を図り、文武両道を目指す。</p>	<p>・魅力的な授業を展開し生徒の学力を向上させるとともに、生徒が能動的・意欲的に学習する姿勢を涵養する。</p>	・各教員が研鑽し専門性を高めるとともに、教材研究を十分に行い、全コースで質の高い授業を展開する。	4
		・教育ICTの導入に向け、タブレット学習・アクティブラーニングを積極的に取り入れた新しい授業形態を模索する。	4
		・授業アンケートの結果を指導に生かし、授業の改善・工夫に努める。	4
	<p>・きめ細かい進路指導を実施する。</p> <p>・国公立・難関私立大学への多数の合格者を出せるよう努力する。</p>	・個別面談・LHR等をとおして生徒をよく観察・把握し、生徒の適性に応じたきめ細かな進路指導を行う。	4
		・各種講演会や各種勉強会を実施し、進路指導に活用する。	4
		・大学入試問題の傾向分析、模擬試験・定期試験の結果分析を日々の学習活動やゼミ活動に反映し、学力の増進を図る。	4
	<p>・中途退学や転学の防止を目指して努力する。</p> <p>・生徒が落ち着いて学習でき、安心して学校生活を送れるような環境を整える努力をする。</p>	・通学路での交通安全指導を行い、公共の場でのマナーを身につけさせる。	4
		・メディアリテラシーの重要性を十分に理解させ、SNS等におけるマナーの向上を喚起する。	4
		・自転車事故等をなくすために、交通ルール遵守を心がけさせる。	4
	<p>・募集広報活動を充実させる。</p>	<p>・本学の教育理念に共鳴する入学者を確保するために、組織的・計画的に広報活動をする。</p>	5
	<p>・特別活動の活性化。</p>	<p>・学業に励むだけでなく、部活動など課外活動に多くの生徒が参加し、充実した高校生活を送れるよう支援する。</p> <p>・清掃など奉仕活動を通して公共心を養うと共に、環境問題を考えるきっかけを与える。</p> <p>・生徒会活動や委員会活動を生徒が自主的に運営できるように働きかける。</p> <p>・日常の挨拶やさまざまな活動をとおして、教員・生徒ともに豊かなコミュニケーションが行われる雰囲気を作る。</p>	<p>・陸上競技部・空手道部・アーチェリー部・女子バレーボール部が全国大会に出場した。</p> <p>・男子駅伝部は8年連続の全国高校駅伝大会に出場した。</p> <p>・多くの部活動が活発に活動し、地区大会・県大会での入賞や関東大会出場を果たすなどの実績を上げた。</p> <p>・生徒会は、水戸地区大会の他校の生徒会と連携して懇談会やマナーアップ活動を行い、活動を広げた。</p> <p>・生徒会や生活委員会が中心となって、挨拶運動や歩きスマホ防止運動などを行い、本校生徒のマナー向上に努めた。</p> <p>・図書委員会が県内私学の代表校として研修会を行い発表を行うなど、委員会活動が活発化してきている。</p>

評価基準 5:十分達成できている 4:達成できている 3:概ね達成できている 2:不十分である 1:達成できていない

1. 教科

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	総合評価	次年度への課題
国語	・コースと連携し、生徒の基礎学力の向上を図る	・コースの独自性、特色を生かした朝の小テスト・ゼミ学習と連携し、授業時間だけではなく日常的な活動の時間を確保することにより、国語に親しみ、社会生活を送る上で十分な国語能力を身に付けさせる。	5	4	コースチーフをリーダーとし、当該コースの状況に合わせてながら基礎学力を向上させる取り組みは十分に行なうことができた。ただし、定着にはまだ至らない部分もあるため、現状に満足することなくさらなる「仕掛け」の工夫に努めていきたい。
	・生徒に家庭学習の習慣を確立させる。	・年度当初に集中して授業の受け方や予習復習に関する姿勢について指導する。特に長期休業中家庭学習用テキストを有効に活用し、学習習慣の定着を図る。	4		定期的な課題を設定することで、学力向上のみならず学習習慣の確立にもある程度寄与することができた。しかしながら、他教科の予習・復習・課題も影響し、国語の絶対的な学習時間をより創出していきたい。
	・生徒に言語活動を通じた情報処理能力を養わせる。	・授業への関わりの中で多くの文章や問題に触れ、読解についてはもとより、特に自身の意見を述べる際に口頭や記述における表現を通じて、その向上を図る。	3		話を聞いて理解するという情報処理については大いに養わせることができたが、インプットの比重が強かったこともあり、「表現する」「対話する」といったアウトプットという点ではまだまだ課題が多い。
	・生徒の理解を深めるための授業スキルの向上を図る。	・公開授業・授業見学や教員間の意見交換を活発に行い、教材研究を省みることにし、生徒にあった授業のあり方を研究する。また、新採教員へのフォロー、助言を教科全体として行うことで、双方のスキルアップにつなげる。	4		アクティブ・ラーニングが市民権を獲得しつつあり、ICT教育への対応も迫られ、各自が大いに悩み、もがき、苦しんだ1年であったなか、従来までの指導を建設的に改めた授業が数多く見られた。教科で対話する時間をさらに増やしつつ、授業見学も積極的に進めたい。

地歴 公民	生徒が目標とする大学に合格するために必要な学力を身に付けさせる。	教員各自が授業力の向上に意識的に努めるとともに、同一科目・学年・コース担当の横のつながりを強め、相互に経験を共有する機会を積極的に持つ。	5	4	地理担当者が高教研地理部会の研修会を主催したり、地理や日本史で巡検を実施したりする中で、科目担当者同士のつながりを強めることができた。教科会も例年より多く開き、教科内で公開授業を実施したりしたため、経験共有の機会を多く持つことができた。
	小論文・大学入学後の学習、さらに人格の陶冶に不可欠な教養を身に付けるための一助となる内容を生徒に提供する。	公民科目やA科目といった入試科目との関連が薄い科目についても、高い習得目標を持って授業を行う。	4		目標を持って授業を行うことはできたが、その趣旨を生徒に理解させるという部分では、まだまだ不十分な面があった。
	ICTやアクティブ・ラーニングの導入に各自が励み、地歴公民科としての新しい授業構築を目指す。	校内で先進的な取り組みをする授業を多く見学し、また校外の研修会にも参加して多くの情報を得、可能であればそれを取り入れた授業を実践し、教科全体で検討する。	4		他教科と比較しても、ICT&ALの導入に熱心で継続的に取り組んでいる教員が多いと思う。ただし、研究授業の参観者があまり多くなく、その後の反省会でも活発な意見交換が行われたとは言えない部分がある。
	主権者教育の一環として、社会全体に対する興味・関心を喚起する授業内容を生徒に提供する。	現代社会など公民科の授業はもちろん、その他の科目においても、新聞などを利用し、授業内容と社会とのつながりを意識させることができる授業を工夫する。	3		政治的中立に配慮しつつ、生徒の主体的な政治参加を促すという困難な課題に対して、現在、具体的な方法を模索中である。一方的な講義ではなく、ALの要素を取り入れるなどの工夫が求められている。学年との連携も必要である。

数学	生徒の基礎学力向上のために有効な実践を常に考え、学力向上を図る。	参考書・傍用問題集を活用し、数多くの問題を解かせ、基礎学力の向上に努める。また、模擬試験にも対応できるよう、生徒の学力層別に目標設定をし、課題に取り組みせていく。小テスト等を定期的に行い生徒の学習の定着度を確認する。	4	4	授業ごとの理解や短期間における定着はできているようであるが、時間の経過とともに忘れて行ってしまう生徒も多くみられる。問題集などを繰り返し解かせ、基礎力をさらに向上させていくことが必要である。
	自主的な学習態度を身につけさせ、家庭学習を定着させる。	宿題等を定期的に出し、回収・チェックを必ず行い、やってこない者は放課後残して指導するなどを行う。模擬試験、定期試験の見直しをさせ、次回の目標を立てさせることから、各自が行うべき学習内容を確認させる。	4		宿題の確認を行い、放課後指導なども定期的におこなってきたが、次回の目標を立てさせ、その自己評価を行わせることが不十分であった。この取り組みを行うことにより家庭学習の定着を身につけさせたい。
	生徒の学力差に応じた指導方法の実践をして、授業内容を工夫する。	校内のファイル配布システムを有効に利用し、学力差に応じた課題等を生徒に課していく。また、より良い授業実践のために、指導方法などの校内研修を行っていく。	3		ファイル配布システムを、まだ十分に活用しきれていない教員も多く有効に活用しきれていない。有効活用ができるよう研修を行っていく必要がある。
	課題・宿題を定期的に出したり、レベルに応じて個別に指示をする。	授業終了後に、その時間に指導した内容の確認のための課題を出していく。	4		来年度は、単に確認問題だけではなく、ALを意識した授業内容の理解のために、言葉による説明などで、表現させる課題も出していきたい。

理科	・自然科学に対する関心を高める。	・教科書だけでなく、時事問題との関連付けを行い、生徒の興味・関心を喚起する。	4	5	自然科学、産業界のニュース等に教師が関心を持ち、学習内容と関連付けて話を出るよう工夫していく。 実験室の利用頻度を増やし、必要に応じICTを利用していく。 ICTやALが有効な場面でそれらを利用し、基礎学力を効果的に定着させる。 模擬試験の結果に囚われ短絡的な演習を行うことなく、実際の入試での得点力を伸ばすように演習問題を精査していく。
		・観察や実験を積極的に取り入れ、イメージを捉えやすくし、探究心も養う。	4		
	・基礎学力の定着を図る。	・教科書内容を理解・記憶させ、小テストや定期試験を用いてその定着を図る。	5		
		・模擬試験や入試問題の演習を通じて、応用力を養う。	5		

保健 体育	・生涯を通してスポーツに親しめるようにする。	・スポーツ活動を通し、スポーツをした時の爽快感やできた時の達成感を感じられる授業を展開する。 ・様々なスポーツ種目を授業の中で取り入れ、自分の好きなスポーツ種目を見つけられるようにする。	5	4	引き続き、スポーツを楽しむ習慣を養うとともに、自ら体力向上に努める姿勢を身につけさせたい。 現在、将来の身近な話題を取り上げ、身の周りの事象に対処できる知識を身につけさせたい。また、視聴覚教材・実習を有効に活用させたい。 公共物を大切に使う姿勢をさらに養わせたい。
	・保健の授業で習得した知識を自分の生活の中で役立て更に実践できるようにする。	・生活の中で起きている話題を授業に取り入れ、自分の生活と結びつけて知識を得られるようにする。 ・実習などを多く取り入れ、生徒が興味関心を得られるような授業を展開する。	4		
	・用具や施設を大切に使う態度を養う。	・授業で使用する道具や施設の準備や片づけをきちんとできるようにし、道具や施設に対する愛着を持てるようにする。	4		

英語	・言語の4技能である「聞く」「話す」「読む」「書く」を総合的かつ統合的に指導することで、入試に対応できる力およびコミュニケーション能力を育成していく。	・聞く力：初期段階においてできるだけ多くの英語の音声聞かせ、文字からではなく音声からの英語習得を図る。	4	4	英語検定やセンター試験のリスニング試験における結果からも、十分に良好な成果がでていると言える。引き続き音声指導を強化していく。 英文を覚えることが、聞く力や読む力の向上につながり、成果が見られる。今後、より一層話す機会を増やし、英語が実技教科であるという意識のもと指導に臨んでいく。 読む力に関しては、十分に時間をとり指導できている。書く力に関しては、今後ICT等を上手に活用し、効率よく低学年から積極的に指導していくことが課題である。 昨年度に引き続き、学年の協力を得て活発に行われた。本校の英語力向上の中心的部分でもあり、また、生徒の学習習慣構築の土台ともなっている。 ICTを使うことで時間の短縮にもなり、昨年よりも多く演習時間をとることができている。しかし、入試レベルまでをどう効率よく定着させていくかは継続した課題である。 英語検定の受験者数の増大、1年次での2級合格数、2年次での準1級合格数などを見ても、英語学習に対する学習意欲の向上と良好な環境を作ることはできていると言える。 教材の選定や指導方法などを教員間で共有し、多様化する入試においても対応できている。今後さらに変化していくことが予想されるため、各自が一層研究を続けていく必要がある。 ICT教育について各教員が積極的に取り組み、その結果や生じた課題について、毎週行われる教科会にて様々な議論を行った。次年度以降も引き続き研修を行ってきたい。
		・話す力：正しい発音での英文暗唱に力を入れ、それを使って授業中に英語を発する機会を増やしたり、リスニング能力向上を図ったりする。	4		
		・読む力と書く力：英文の直読・直解が出来る。まとまりのある段落や文章が書けるように指導する。	4		
	・学年と教科が連携し英語学習の基盤を作り、学校全体で生徒が積極的に英語学習に取り組める環境を作る。	・語彙の習得：学年、コースと協力し、朝学習として単語テストを行うなどの活動をする。それを定期試験と連動させて、一層の定着を図る。	5		
		・文法の習得：文法の習得には時間を要するが、授業以外にゼミを各コースで開講し、基本から応用レベルまで向上させていく。	4		
	・多様化する入試科目としての英語を研究する。それにしっかりと対応できるようにするために教員の更なる英語指導力の向上を図る。	・動機付け：昨年に引き続き、授業の内容や教材を工夫し、生徒の動機付けを行い、さらに英語検定などの資格取得を目指させることで学習意欲を高める。	5		
		・実践力の強化：大学入試の出題傾向や出題形式を教員が分析した上で、教員自らが生徒に合った教材を作成し、入試に対応できる力を付けさせる。	5		
		・指導力の強化：校内で研修会を行ったり、教員各自が外部の研修会などに積極的に参加したりして、指導法のより一層の改善を行っていく。	4		

評価基準 5:十分達成できている 4:達成できている 3:概ね達成できている 2:不十分である 1:達成できていない

芸術	生涯を通じて芸術を愛好する心情を育てる。	表現する喜びや達成感を味わえるような授業を展開する。	4	4	自己の感性の様々な表現方法を知り、完成や成熟を目指して時間をかけて取り組む。
	感性を高め、創造的な表現能力を伸ばす。	主題(テーマ、意図、用途、構想)を明確にし、素材(材料や用具)の特性を生かした表現ができるように工夫させる。	4		情報機器を活用しながら、新たな表現方法、発表方法を見つける。
	鑑賞の能力を伸ばす。	鑑賞をとおして、芸術表現の特質や様式、表現方法などを理解し、その良さを味わえるようにする。	4		宗教・異文化の理解をしながら、演者の表現力の豊かさに触れる。
		根拠に基づいた個々の考えを持てるようにする。	4		多方面の芸術鑑賞を自発的に行い、観る力を育む。

家庭	自立することを目標に、さらに人とともに生きることを身につける。	家族・子ども・高齢者など共生社会について理解できるようにする。	4	4	持続可能な社会をつくる暮らしの担い手になる。
	人との協力の中で豊かな生活と環境を身につける。	衣食住、・済生活および環境について理解し、実践できるようにする。	4		自立を目標にさらに共に生きるために生活基礎および環境を身につける。
	実習を通して実践力を身につける。	被服実習・調理実習などを通して実践力を身につけ、日々の生活に生かせるようにする。	5		実習を通して実践力・応用力を身につける。

情報	アプリケーションソフトの操作方法を習得する。	林間学校や修学旅行に関するレポート作成を通してワープロソフトの操作をできるようにする。	5	4	基本的な操作については身につけているが、今後は実用的な技能も習得させたい。
		エクセルの関数を使って計算式を立てたり、グラフを作成したりして表計算ソフトの操作をできるようにする。	5		生徒自らが試行錯誤しながら計算式を立て、グラフを作成する技能を習得させたい。
		パワーポイントのアニメーションなどを駆使してプレゼンテーションソフトの操作をできるようにする。	5		アニメーションなどを使って、簡潔な文章で相手に伝わりやすいスライドを作成する技能を習得させたい。
	情報発信者としての態度、姿勢を身につける。	発表会を通して正しい情報を発信する能力を身につける。	3		自分の考えを相手に分かりやすく伝える能力を身につけさせたい。
	ネットワークを利用する上でのマナーや態度を身につける。	インターネットを利用して、正しい情報収集能力を身につける。	3		インターネット上の情報がすべて正しいとは限らない。正しいことと誤っていることの違いができるような能力を身につけさせたい。
		レポートに引用先を明記したり、著作権に配慮して要約したりできるようにする。	3		著作権に配慮して、レポートの引用の仕方について徹底させたい。

評価基準 5:十分達成できている 4:達成できている 3:概ね達成できている 2:不十分である 1:達成できていない

2. 校務分掌

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	総合評価	次年度への課題
教務部	教員の授業力向上に努める。	来年度から導入するタブレット端末を利用した授業の研修を含め、個々の授業に関するスキルアップを目指す機会を、関係各所と連携しながら増やす。	4	4	本年度は職員会議でICT教育研修会や各教科で個々に研修会が実施され、ICT教育への準備が着実に進んだ。次年度も多く研修会が実施され、また外部への研修会へ積極的に参加する機会が増えることが望まれる。そして、研修会で得た知識を駆使した授業で、生徒の理解力向上につなげたい。
	学校備品の丁寧な扱い方を徹底する。また、消耗品の無駄をなくする。	コピー機・印刷機・製本機は無理な扱いをせず、普通に扱うようにする。消耗品の無駄をなくすように心がける。	3		授業やゼミ等で使用する印刷物の量が非常に多く、印刷機や製本機で想定されている一般的な使用頻度を超過しているようで、印刷機や製本機の故障が減らない大きな原因である。また、消耗品の量も多いままである。急な変更は難しいと思われるが、いろいろな工夫で対応する必要がある。
	定期試験関係の仕事を徹底させる。	教務辞典の定期試験に関するマニュアルを熟読していただき、何事も問題なく、定期試験が実施できるようにする。	5		定期試験関係の仕事は問題なく終了した。各先生方への諸連絡がきちんと伝わり、スムーズに定期試験が実施できた。課題としては、回収する答案用紙の枚数が1枚か2枚であるべきところが一部の教科で3枚を超えていたことで、この点を徹底させたい。
生徒指導部	・規範意識を持って自主的に行動できる生徒を育てる。	交通ルールやナマナーについては、公共の場での責任ある行動について考える良い契機として、また、自分の生活を守る大切な規範として捉え、積極的に指導を行う。	4	4	登下校時の駅南大通りの通学状況は週2回の通学指導により、外部からの苦情も少なくなり、概ね良好である。反面、乗車マナーに関する苦情が多く寄せられており、来年度以降の課題とした。情報安全教育は例年通り実施しているが、SNSトラブルは数件発生している。また、今年度はSNSへの個人情報の掲載がきっかけとなり、なりすましの被害に遭う生徒もいた。次年度以降も各種安全教育を継続していきたいと考えている。
	・生徒会活動、各種委員会活動を活性化させ、生徒達が自主的に課題に取り組む機会を増やし、部活動を含めた学校生活全体の充実を図る。	・生徒会、各種委員会委活動等の自主的な活動を活性化させる。野球応援、外部団体の積極的な参加を通して外から学校を見る視点を養い、愛校心を養う。	4		担当者の努力により、以前よりも、生徒会を中心とした生徒の活動は活発になっている。
	・基本的な生活習慣を確立させ、充実した学校生活を送る基礎を作る。	・教職員の共通理解のもと、足並みの揃ったきめ細かい生活指導体制を確立する。いじめや問題行動には迅速に対応する。	4		頭髪や服装の指導においては、各教員の共通理解のもと、足並みのそろった指導が必要であり、来年度はさらに強化する必要がある。今年度は年3回のいじめ調査を実施し、いじめの早期発見・対応に取り組んだ。次年度以降もいじめ調査を継続し、全教員で取り組む体制を確立していきたい。
学習指導部	生徒の学力の向上を目指した課外学習を提供する。	・学年や教科と協力し、学年・コース・学力に応じたゼミや講習会を開講する。	4	4	・生徒が端末を使って利用できる教材や学習支援システムを活用することによって、主体的学習の促進と基礎学力の定着を図る。
	授業等での学習指導への取り組みを見直す。	・他校訪問や講演会、研修会を行い、学習指導や進路指導の向上に生かしていく。また、入試改革を視野に入れ、ICT活用などを含めて、これからの学習指導のありかたを探っていく。	4		・今後の学習指導の方向性を検討するにあたり、可能であれば外部機関との連携も取り入れていく。
進路指導部	第一志望校合格を目指す3年生の支援	赤本等の過去問、過去の推薦入試受験報告書及び志望理由書等の資料を随時閲覧または貸出できるようにする。成績上位生徒には校外模試(『東大入試実践模試』等のいわゆる『冠模試』)を積極的に受験させ、より高い目標を持たせるようにする。教科書終了後の授業(演習)では、センター試験だけでなく、難関国立大学の2次試験問題を積極的に扱うよう、各教科に働きかける。	5	5	進路関係資料のストック(推薦入試受験報告書及び志望理由書等の写し)は年々充実しており、生徒・教員ともかなりの頻度で活用してくれた。赤本の貸し出し件数も年々上昇傾向。進路に関して生徒に高い目標を持たせ、意識を維持させていくには、担任や各教科担当からのほたらきかけや励ましが必要不可欠である。
	進学関連情報の積極的な発信	進路指導室の整備と資料(各大学の資料・進学情報誌等)のさらなる充実を図る。進路講演会やPTA研修会を通じて、現在の入試制度や本校の実情等についての情報を保護者に発信する。本校HPの資料アーカイブを活用し、主要国公立大学/私立大学のオープンキャンパス情報や各大学の一言PR等を随時アップし、受験校選択の参考に供する。	4		各大学の一言PRに協力してくれた大学教が50校とやや低迷。学生募集活動で来校する大学へのほたらきかけを強化する必要あり。また、一般入試の出願に際して、些細ではあるがトラブルが数件あった。WEB出願の手順等について、生徒にきちんと説明する機会を設けるべきであった。
	自らの進路を自らの手で探求する姿勢の涵養	テレメール等の資料請求のツールや各種進学情報関連サイトを紹介し、生徒が上級学校について自らの手で調べることができるようにする。進路指導室に教員が常駐し、いつでも生徒に助言ができる体制を整える。	5		学年集会等の機会を利用して、『生徒が上級学校について自らの手で調べることができるようにする』ためのツール(冊子やWEBサイト)はそれなりに紹介することができた。1・2年生がアドバイスを求めて進路指導室に来室するケースも増えている。ただし、生徒への進路指導の主体はあくまでも担任である。

評価基準 5:十分達成できている 4:達成できている 3:概ね達成できている 2:不十分である 1:達成できていない

保健環境部	・社会貢献への意識向上を深めさせる。	・ペットボトルのキャップ回収を行い、NPO法人世界の子どもにワクチンを日本委員会へ寄与する。 ・3年生による赤十字血液センターへの協力をする。	4	4	・ペットボトルキャップについては、業者側の都合でストップしていたので、来年度に寄与する。 ・献血活動では、150名申し込みのうち129名が実施しており、その内86名が400mlの提供と多くなっている。
	・衛生活動、美化活動の充実。	・各委員会による校内施設の点検、不備報告の充実化。	4		・衛生、美化ともに係りの役割を果たしており緑化活動も少しずつ動き始めた。

渉外部	魅力的なPTA活動を目指す。	システム(お知らせメール・資料アーカイブ等)を活用し、PTA行事や活動についてアンケートをとったり、生徒の学校生活の様子やPTAの取り組みを伝えるなどして、保護者が学校を身近に感じ、進んでPTA活動に参加したくなるようにする。	4	4	インターネット環境が整備され、保護者への諸連絡や案内・アンケート調査等が簡易かつスムーズになった。この1年で、保護者もこのシステムに概ね慣れてきた。来年度からのタブレットPC導入に伴い、学校と保護者の双方向の意思疎通に発展させたい。
	開かれたPTAを目指す。	総会や常任委員会での出席率を高め、活発な意見の交換を促したり、生徒会役員と本部役員との話し合いを実施し、出てきた意見を検討して、学校改善に役立てる。	4		各委員会・学年・支部等多くの団体で活発な活動が行われた。共働き家庭が増加している中、多くの会員が積極的に様々なPTA行事に参加できた。限られた予算を有効、公平に多くの会員に還元できるよう更なる企画・方法の再考が必要がある。
	機能的な組織作りを目指す。	PTA組織や学年・支部・専門委員会の活動等、PTAに関する情報をPTA会員に周知し、多くの会員が活動の主体となりたくなるような組織を目指す。また、必要に応じてPTA会則を見直し、役員の選出が単純、円滑にいくようにする。	4		インターネットを活用し、PTA役員・学年委員等の選出に関するアンケート調査等を実施して幅広く候補者を募り、公平なかつスムーズな役員選出ができた。また、PTAの現状に則した組織や会則の見直しが必要である。

生徒募集部	昨年度以上の志願者を確保する	見学会等の成功はもとより、入試制度等にも創意工夫を凝らす	3	3	推薦・一般・一般(再)の三度の入試において、本年度以上の志願者を確保する。
	定員を満たす入学生を確保する	推薦・一般単願合格者を増やすため、中学校だけでなく塾との関係を強化する	4		塾や中学校関係者に対する本校説明会はもとより、夏の見学会等の行事に、足を運んでもらうことで、本校への理解を深めてもらう。
	小学生にも本校の魅力をアピールする	見学会に小学生対象の日を設ける	3		小学生・その保護者に対し、塾を中心に早期よりPR活動を行う。吹奏楽部や演劇部などと連携し、アトラクションを充実させる。

システム管理部	すごいシステムを当たり前前に提供する	2017年度入学生からのアクティブラーニング&教育ICT(AL&ICT)環境本格導入に向けて、生徒用ネットワークを2000台規模の端末の通信に耐えうるものへと進化させる。併せて資料アーカイブのサービス拡充を継続して行い、国内屈指の自校構築型AL&ICT環境を目指す。	5	5	先進校として国内・県内の多くの学校の参考となるような仕組みの工夫やシステムの改善を常に行っていく
		「より生徒に届く」「より生徒が興味をもてる」新しい指導方法を身に付けるための教員研修会を実施し、それらを記録として残すことで、次年度以降の新採教員への継続的なレクチャーを行えるようにする。	5		積極的に活用できていない教員も、「活用せざるを得ない状態や環境」となるようなシステムの仕組みを構築する
		資料アーカイブのグループ機能を通じて、多彩な資料の提供と、きめ細かな理解度調査により作り上げられていく「ポートフォリオ」を意識した問題解決手段を生徒に提供する。	5		アクティブラーニングで重要な「生徒のアウトプット」と「充実したポートフォリオの構築」を基盤に、学習活動や課外活動などで色々な場面でタブレットの活用を促進する

評価基準 5:十分達成できている 4:達成できている 3:概ね達成できている 2:不十分である 1:達成できていない

3. 学年

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	総合評価	次年度への課題
1学年	基本的な生活習慣の確立と規範意識の向上を通じて、高校での集団生活に適応できるように指導する。充実した学校生活を送ることが出来るよう、一人一人に目標を自覚させ、その目標に向かって努力出来る生徒を育成する。	朝自習を年間計画の元に行うことで、無駄な遅刻をなくし、生活のリズムを安定させる。朝夕のS HRやHRなどを通じて、集団生活に必要なルールや作法を継続的に指導することで、規範意識の向上を目指す。学習活動や部活動への参加を通じて、目的を持った学校生活を送ることが出来るように指導する。	4	4	多くの生徒が年間を通じて朝自習に参加することが出来た。朝きちんと登校することが生活リズムの安定につながり、無駄な遅刻を減らすことが出来たと思う。各担任がHRを通じて規範意識や集団生活のルールを継続的に指導した結果、学年集会の集合や解散、話を聞く態度など、生徒たちはこの1年を通じて大きく成長を見せた。放課後も部活動やゼミ活動などへの積極的な参加を促し、生徒たちが充実した学校生活を送ることが出来るよう心がけた。細かいトラブルは散見されたが、大きな問題もなく比較的落ち着いた1年間を送ることが出来たことを評価したい。
	自らの将来の進路に関して、真剣に考えることができる生徒を育てる。2年次に向けて適切な文理選択ができるように指導する。	進路適性検査、キャリアガイダンス、教育課程説明会、進路講演会などを通じて、生徒たちが進路について真剣に考える機会を設ける。学級懇談会や面談を通じ、保護者との情報の共有を図り、保護者・教員が共通理解の元で生徒の進路についてサポートすることができる環境整備に努める。	4		文理選択を含む進路指導について、予定した行事を実施することが出来た。ただ、実施の時期が例年よりも遅れ気味になってしまったことがあり、次年度への反省点としたい。それぞれの行事について、案内の時期や方法などが適切であったかもう一度確認し、次年度に向けて改善できる点があれば改善していきたいと考えている。
	基本的な学習習慣を確立し、自らの意志で主体的に「学ぶ」ことのできる生徒を育成する。	朝自習や放課後のゼミ学習などを利用して、学習習慣の定着を図る。各教科とも連携して予習、授業、復習の学習サイクルを確立し、高校生として必要な家庭学習の質と量を確保することが出来るように指導する。	4		1学期ゼミ・夏季ゼミ・2学期ゼミ・冬期ゼミとも数多くの生徒が積極的に参加することが出来ていた。途中でやめたりせずに、最後までしっかりとゼミを入試科目受講した生徒が多かったように思う。長期休業中の宿題についても、各コースごとに精選し、質量ともに無理のない形で提供できた。二者面談を積極的に行うなど各担任を中心に生徒に対するきめ細やかな指導を行う事が出来た。理系文系に分かれる次年度は、自らの進路希望をしっかりと自覚させ、主体的に学習に取り組むことが出来る生徒の育成を目標に指導を継続していきたい。
2学年	進路の希望に応じた、入試に対応する学力を身につけさせる。さらに、将来にわたって役立つ学力の養成を目指す。	早朝学習やゼミ学習に積極的に参加するよう働きかけ、学習時間を確保させる。長期休業中や放課後などに、学習会(自習・特別講義)などを開催するよう心掛ける。小論文の指導を通して、社会に出て必要となる「論理的に考える力・書く力」を高める。	4	4	早朝学習や放課後のゼミ学習を通して、継続的に学習時間の確保はできている。しかし、第二学年特有の中だるみのせいもあり、早朝学習への参加率がやや下がっているクラスもあると言わざるを得ない。次年度は、最終学年のため、生徒により具体的な目標を持たせることで緊張感を高め、進路の希望が実現できる真の学力を身につけさせたい。
	自身の進路について主体的に考えさせ、より具体的な進路目標を設定できるように指導する。	大学出張講義や進路講演会などの行事を通して、生徒・保護者が進路について考えるきっかけをつくる。生徒・保護者に、大学等のオープンキャンパスに積極的に参加するように働きかける。志望理由書の指導を通して、自分の将来について考える時間をつくらせる。	5		大学出張講義・進路講演会など進路関係の行事を無事行っている。ただし、進路講演会などの行事に参加できない保護者もあり、今後は、より保護者との情報共有ができるよう心掛けていきたい。小論文や志望理由書の指導に関しては、外部の講師を招いたガイダンスも実施できており、十分な指導ができたと言える。生徒達には、志望理由を明確にさせ、受験に耐える精神力をつけさせたい。
	集団生活を送る上での規範意識を養い、社会の一員として道徳心をもった行動ができるように指導する。	クラスマッチ・文化祭・修学旅行などを通して、生徒や教員が時間を共有し、他者との関わり合い方を学ばせる。生徒指導部の方針に基づき、学年全体として校則などの規律を守らせるように指導する。	4		クラスマッチ・文化祭・修学旅行などの学校行事を、大きな問題もなく行うことができた。これは、担任の指導の下、生徒たちが集団の一員であることを自覚し、他者を思いやることや規律を遵守できたことが理由である。しかし、年間を通してみると一部の生徒ではあるが、生徒指導部の指導を受けてしまっている。次年度は、水城高校の最上級生として、下級生の模範になれるよう指導を継続したい。
3学年	悔いのない進路実現を有効にサポートすることで、生徒を育て、その成長を促す。	担任と生徒との二者面談はもちろん、学年主任・教科担当者・保護者などを含んだ面談ができる限り多く実施し、生徒を支えようと、満足度の高い進路を模索する。	4	4	各担任が粘り強く面談を繰り返し、生徒を支え、学年主任もそれをサポートすることができた。結果的に得られた学力はさまざまであり、合格校の難易度は多岐にわたり、試行錯誤の繰り返しの中で指導方法が再検討されなければならない部分もあるが、学校の指導に対しては、十分に高い満足を得られたと考えている。
	国公立大学や難関私立大への合格者を多数出すことで、生徒や保護者のニーズに応える。	模試などの分析を通し、生徒の学力向上のための方策を検討する。生徒の長所を生かしたAO、推薦入試などを積極的に利用する。	5		学力向上のためにコース毎に様々な取り組みを行い、生徒をバックアップした。推薦・AO入試についても学力向上の機会として捉え、積極的にチャレンジさせた。決して諦めることのない丁寧な指導で、高い合格率を実現することができた。生徒理解をさらに深め、生徒の特長を伸ばす指導を今後も実現したい。
	生活指導・学校行事への取り組みについての指導を通して、豊かな人間性を養う。	クラスマッチ、水城祭、野球応援、卒業関係事業などへの積極的な参加を促し、集団のルールを守り、周囲に配慮しながら、主体的に行動できる生徒を育てる。	3		各行事に積極的に参加できた生徒は多かったが、人間関係等の悩みにより、学校生活に大きなストレスを感じる生徒もおり、様々な対応の必要性に迫られた。複雑化する社会の中で、生徒の多様性に応える指導が求められていることを痛感する。

評価基準 5:十分達成できている 4:達成できている 3:概ね達成できている 2:不十分である 1:達成できていない